

【宗祖法然上人御法語】

(第十) 小消息こしょうそく

1

末まつ代だいの衆しゆ生じやうを往生極樂の機にあてて見るに、行ぎやう 少なしとても疑うべからず。

乱れきつた末法まつぽうの時代、さらにはそれ以降の時代に生きる人々が、阿弥陀様の極樂浄土へ往生を遂げ得るか否か、という疑問について、おおよそ次の四点が考えられます。

2

一念十念に足りぬべし。

一つには、称えるお念仏の数が少ないから往生など叶わないのではないかと疑ってはいけません。阿弥陀様の本願のお力は、たとえ十声あるいは一声のお念仏であったとしても往生を叶えてくださるのです。

3

罪人なりとても疑うべからず。

二つには、自分は罪深い人間であるから往生など叶わないのではないかと疑ってもいけません。

4

「罪根深きをも嫌わじ」と宣えり。

お釈迦様は「たとえどんなに罪深い人であろうとも、阿弥陀仏が見捨てるということとは決してありません」とおっしゃっているのですから。

5

時下^{くだ}れりとても疑うべからず。

三つには、今はまさに乱れきった末法^{まっぼう}の世であるから往生は叶わないのではないか、などと疑ってははいけません。

6

法滅^{ほうめつ}以後の衆生^{しゆじょう}、なおもて往生すべし。

末法^{まっぼう}の時代が過ぎ、ついには教えの全てが滅んでしまうような時がやってきても、お念仏を称える人ならば往生が叶うのですから、

7

い^いわん^{わん} 近^{きん}来^{らい}をや。

まして今の時代にそれが叶わないことなどありませんか、いや決してそんなことはありません。

8

我が身わるしとても疑うべからず。

四つには、自分は煩惱を断ち切れぬ至らぬ身であるから往生など叶わないのではないか、と疑ってもいけません。

9

「自身はこれ、煩惱具足せる凡夫なり」と宣えり。のたま

かの善導ぜんどう大師でさえ、「自分こそ煩惱にまみれた愚かな人間である」と

仰おつしやっているのです。

10

十方じつぽうに浄土多けれど、西方さいほうを願うは、十悪五逆の衆しゆじよう生の生まるる故なり。

さて、お浄土は十方じつぽうに無数ありますが、阿弥陀様の西方さいほう極楽浄土に往生することを願う理由は、十悪五逆というような罪を犯してしまった人でさえも往生が叶うからです。

11

諸仏の中に弥陀きに帰したてまつるは、三念五念に至るまで、自ららいこう来迎し給う故なり。

無数の仏様の中から阿弥陀様におすがりする理由は、三遍とか五遍といったほんの少しのお念仏しか称えなかつた者であつても、臨終には阿弥陀様自らが来迎らいこうしてくださるからです。

12

諸行しよぎようの中に念仏を用うるは、彼の仏の本願なる故なり。

数多い往生のための行ぎようの中からお念仏を選ぶ理由は、阿弥陀様がお誓いになられた本願の行ぎようであるからです。

13

今弥陀の本願に乗じて往生しなんに、願として成じようぜずと云う事あるべからず。

今、私たちが阿弥陀様の本願にこの身をまかせ、必ず往生しようと願ってお念仏を称えれば、その願いが果たされないことなど決してありません。

14

本願に乗ずることは、信心の深きによるべし。

本願にこの身をまかせて往生するということは、阿弥陀様をお慕いする心の深さによるのです。

15

受け難き人にんじん身を受けて、遇い難き本願に遇いて、発し難き道心を発して、離れ難き輪廻の里を離れて、生まれ難き浄土に往生せん事、悦びの中の悦びなり。

幸いにも私たちは人としてこの世に生を受け、阿弥陀様の御教えに巡り遇い、今まで発し得なかつた往生浄土の志が発り、離れ難いこの生死しようじ輪廻の世界を抜け出し、生まれ難い浄土へ往生を遂げることができるのです。これ以上の悦びがありませんか。

16

罪は十悪五逆の者も生まると信じて、少罪をも犯さじと思うべし。

たとえ十悪五逆というような重い罪を犯してしまった人でも、自分の

あやま

過ちを心から反省し、阿弥陀様に救いを求めてお念仏を称えたならば、

極楽に救われると信じる一方、だからこそ小さな罪も犯すまいと心がける

べきです。

17

罪人なお生まる、いわん 況や善人をや。

重い罪を犯してしまった人でも阿弥陀様に救いを求めれば往生は叶うのです。常に我が身を振り返りつつ、お念仏を称え、罪を犯さないように心掛けている人が往生できないことなどありませんでしょうか。

18

ぎよう 行は一念十念なおむな虚しからずと信じて、むけん無間にしゆ修すべし。

たとえ一遍、十遍のお念仏でさえ往生が叶わぬはずはないと信じつつも、なお絶やすことなく称え続けていくべきです。

19

一念なお生まる、いわん 況や多念をや。

一遍のお念仏でも往生は叶うのです。ましてや生涯を通じて称えることの素晴らしさはいうまでもありません。

阿弥陀仏は不取正覚の言を成就して、現に彼の国に在せば、定めて命終の時は来迎し給わん。

阿弥陀様は「第十八願が果たせぬうちは、誓って仏とはならない」という本願を成就されてお浄土を建立し、今現にそこにいらっしやるのです。ですから、私たちがその本願に従ってお念仏を称えれば、命尽きる時には阿弥陀様が必ず私たちを迎えに来てくださるのです。

21

釈尊は「善哉、我が教えに随いて生死を離る」と知見し給い、六方の諸仏は「悦ばしき哉、我が証誠を信じて、不退の浄土に生まる」と悦び給うらんと。

お釈迦様は「よろしい、それでいいのだ。私の説法に従って、お念仏を称えて、迷いの世界を離れていく」と見守っていてくださるのです。あらゆる世界に在す諸仏は「悦ばしいことだ。我々が真実と証明したことを信じてお念仏を称え、迷いの世界に再び戻ることのない極楽浄土へ往生していく」とお悦びになることでしょう。

22

天に仰ぎ地に臥して悦ぶべし、このたび弥陀の本願に遇うことを。

これ程までに素晴らしい阿弥陀様の本願に、今やつと出遇えたことに、天をも仰ぎ、地にも臥す程にお悦びなさい。

23

行住坐臥ぎようじゆうざがにも報ずべし、彼の仏の恩徳おんどくを。

お釈迦様のそうした尊い御恩に報いるためにも、いついかなる時もお念仏をお称えください。

24

頼みても頼むべき、「乃至十念」の詞ことば。

絶対の信心を傾けるべきは、阿弥陀様が第十八願に「念仏を称える全ての者を迎えと摂り、極楽浄土へ往生させよう。そうでなければ仏とはならない」とお誓いちかになられた御文ごもんであり、

25

信じてもお信ずべきは、「必得往生」の文もんなり。

また信じ委ねるべきは「阿弥陀仏の本願は虚むなしいものでは決してない。

私たちがお念仏を称えれば、必ず往生が叶うのである」と仰おつしやった

善導ぜんどう大師のお言葉であります。